

わたしたちは文化人類学を自然化できたのか

著者	中川 敏
雑誌名	民博通信 Online
巻	168
ページ	20-21
発行年	2021-09-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009849

わたしたちは文化人類学を自然化できたのか

文 中川 敏

はじめに

本稿は、2017年10月より2021年3月にかけて行なわれた共同研究会「文化人類学を自然化する」の報告である。以下では、まずいかにしてさまざまな研究者がこの研究会に集まってきたのかを年代順に描く。そのうえで、2021年3月に開催したオンライン会議の報告をし、本研究会の成果をまとめる。なお、文中の敬称は省略する。

大阪で

研究代表者であるわたし（中川敏）は、その研究生活を通じて構造主義的な人類学を展開してきた。そうするなかで、わたしは構造主義の体系のなかで「記号の恣意性」という規則が、〈公理〉ともいべき位置を占めていることに気がついた。公理といったのは、その規則は証明されるべきものではなく、むしろそれを基礎として体系が構築されていく、そのような規則だ、という意味である。それは正しい規則なのではなく、それを正しいと仮定すれば面白い理論体系が生まれる、そのような規則なのだ。たとえば、平行線の公理自身は証明し得ない。しかし、それを正しいとすることによって、ユークリッド幾何学という楽しい理論体系が構築され得たのである。公理は、それを否定することを拒むものではない。実際平行線の公理を否定することによって、ユークリッド幾何学と同じくらいに楽しい理論体系、非ユークリッド幾何学が構築されたのである。わたしは、「記号の恣意性」を否定することによりどのような楽しい非構造主義的人類学が展開できるか考えはじめた。おおよそ20年ほど前の話である。10年ほど1人で考えてきたが、非構造主義的人類学がどのようなものとなるのか、そのイメージをつかむことができなかった。

九州で

そのイメージがある程度つかめはじめたのは、本研究会のメンバーである浜本満との対話、そして彼の一連の論文によるところが大きい。そして、彼を通じて知ることになった戸田山和久という哲学者による一連の論考が、わたしの蒙を啓いてくれた。かくして、非構造主義的人類学としての「自然化された人類学」のイメージが、わたしの頭のなかで誕生したのである。

金沢で

それからさらに5年後、金沢で開かれた、ある哲学の学会で、たまたま当の戸田山、さらには社会心理学者の唐沢かおりと知己を得た。社会心理学は、もし人類学が自然化された場合、人類学がとるだろう形に最も近い学問領域であるとわたしは考えている。わたしが今回の研究会に以上の浜本、戸田山、唐沢を誘うと、3人から快諾の返事をもらうことができた。

新潟で

「恣意性」を否定する非構造主義的人類学が「自然化された人類学」であることに気づくと、これまでわたしがあまり注意をはらってこなかった人類学のさまざまな流れが、非構造主義的人類学のひな形となりうるものとして見えてきた。一つは民族誌のなかで人類の普遍性を訴える流れである。そのような本（ドナルド・ブラウン『ヒューマン・ユニヴァーサルズ—文化相対主義から普遍性の認識へ』（新曜社2002）など）を精力的に翻訳している中村潔に研究会への参加をお願いした。

京都で

もう一つ、「自然化された人類学」と重ねる流れは、もちろん生態人類学である。とくに京都大学を中心にした〈コミュニケーションの自然誌〉学派ともいべき流れは、理論に重点を置いた議論を展開しており、生態学的人類学のなかでも特別な地位を築いている。この学派の現在の中心である高田明の参加は、この研究会の幅を大きく広げることとなった。なお、初期のころからこの学派の中心人物であった菅原和孝も、研究会の後半から（正式なメンバーではないが）議論に参加してもらった。さらに京大出身の生態人類学者、飯田卓もメンバーに加わった。

大阪で

高田、菅原ともに霊長類学に詳しいとはいえ、霊長類学の専門家にも是非参加してほしいと願った。研究会発足当時のわたしの同僚であった山田一憲にこの会の主旨をつたえたところ、彼にも参加してもらえることになった。最後になるが、そして重要度では他のグループと並ぶだけの重要性をもつグループとしてアクターネットワーク理論（ANT）の論者たちが

中川 敏（なかがわ さとし）

大阪大学人間科学研究科名誉教授。専門は文化人類学、地域研究。著書に『言語ゲームが世界を創る—人類学と科学』（世界思想社 2009年）、論文に How To Buy Knowledge in Ende. In M. Mizumoto et al. (eds.) *Ethno-Epistemology: New Directions for Global Epistemology* (Routledge 2020)、「フェティッシュを飼い馴らす」川田牧人編『現代世界の呪術—文化人類学的探究』（春秋社 2020年）などがある。



呪物を売る女性。かつて山地に住んでいたトライブ（部族）は呪力を持つと信じられている（2016年、インド・マハーラーシュトラ州、松尾瑞穂撮影）。

いる。阪大の関係者である中川理および中空萌、さらに民博の松尾瑞穂に、自然主義の人類学がじつはANTと重なる部分が多いということを知り得てもらった上で、メンバーとして参加してもらった。

かくして理想的なメンバー構成のもと、2017年に「人類学を自然化する」研究会は発足し、国立民族学博物館において研究会を重ねていった。

空の上で

パンデミックの影響により2020年2月の研究会を最後に対面での研究会開催は中止した。以降は会場を地上から空の上（オンライン）へと移行した。オンラインでの開催は10回ほど続き、濃密な議論を重ねることができた。そして、2021年3月21日に、東京大学の「現代人類学研究会」の第119回例会として、当研究会のメンバーによるオンラインのカンファレンス「人類学を自然化する」を開催した。ここにその内容を紹介する。なお、中川理は参加できなかったが、提出原稿に基づいて紹介する。

カンファレンスは、前半部が通時的な方向性を強調する「基礎編」、後半部が共時的な方向性を強調する「応用編」とい

う二部構成をとった。基礎編では、ヒトが文化をいかにして獲得したのかという閾問題および非自然的記号の発生をめぐって、以下のテーマの発表がなされた。ニホンザルにおける共同作業の発生（山田）、模倣と言語の自然化（高田）、記号の原型としてフェティシズム（中川敏）、アフォーダンスと関連性理論（飯田）、そして人類学におけるメタファーの使用（中村）である。以上の発表に対して、社会心理学の唐沢による、人類学と心理学の方法論との対比のもとに、アフォーダンス概念の使い方やその他をめぐってのコメントがあった。応用編では、ANTと自然主義の関わり合いをめぐって以下のテーマの発表がなされた。模倣と物語（浜本）、インドの呪術と

政治運動のからみあい（松尾、写真参照）、インドの環境運動と法制化のからみあい（中空）、モン移民の生き方（中川理）、そして、アフリカ採集狩猟民の語りかた（菅原）である。以上の発表に対して、哲学者の戸田山によるコメント、とりわけ人類学者が「表象」概念へ執着していることに関するコメントがあった。

はたしてわたしたちは「文化人類学を自然化できたのか」。それぞれのグループにとって自然化の意味が違うだろうことは分かってもらえると思う。たとえば、生態人類学者が「自然化」に向きあう仕方と、ANT論者たちが「自然化」に向き合う仕方は大きく違うはずだ。それぞれのグループがそれぞれの仕方で自然化を進めたことはたしかである。それは本共同研究の一つの成果といえるだろう。それ以上に大きな成果がある。模倣という考え方が自然化にとって重要であることが、グループを横断して認識された、という点である。たとえば、進化人類学者、マイケル・トマセロの模倣概念とANTの始祖、ガブリエル・タルドの模倣概念との間の類似そして相違をさぐることで、共同研究全体としての自然化の理解を深化させることができたのである。